

No.3107

近現代中国の地域研究と日本—1930-50年代における知日派の日本研究団体を中心に

東京大学大学院 総合文化研究科 博士後期課程

高柳峻秀

本研究の目的は、民国期中国における日本研究団体の活動と日本研究雑誌の日本論を分析することで、中国人の日本観、中国知日派の役割、中国における「地域研究」の形成と発展を明らかにすることである。

感染症の流行拡大のため、活動計画を2年から1年に縮小して中国や台湾への渡航を断念したが、米国議会図書館と国会図書館関西館で資料調査を実施した。これらの資料をオンラインで購入した文献と併せて読み込み、以下の点を明らかにした。

第一に、太平洋学社が上海で創刊した『黒潮』、東京神田の留日学生総会が創刊した『留日学生季報』など、早くも1920年前後の段階で中国人執筆陣による日本研究雑誌が出版されていたことを明らかにした。この時期の日本研究団体と日本研究雑誌は、日本経由で西洋の学知を吸収することを第一目的としていた中国人日本留学生や日本留学出身者が、日本それ自体に注目し、日本に関する知識や情報を継続的に発信しようと試みた先駆的な活動だった。

第二に、1930年代前半に活動した研究日本社と機関誌『研究日本』が、中国を拠点とした台湾人による初の日本研究団体と日本研究雑誌である可能性が高いことを突き止めた。同社は、日本の台湾統治脱却を標榜する政治団体「台湾民主党」を母体としていたほか、広州国民政府から支援を受けるなど、華南地域の反蒋介石派と台湾人の反日運動と密接な関わりがあった。

第三に、日中戦争期において、駐日大使館や総領事館などから重慶に引揚げてきた日本留学出身の外交官たちが、外交部亜洲司（のち亜東司）で対日情報収集に取り組み、その成果を『敵偽紀要』などにまとめ、政府機関や要人に定期的に提供していたことを明らかにした。

第四に、対日戦勝利後も日本研究は依然として重視され、戦前戦中から「日本研究会（のち日本評論社）」や国際問題研究所などで活動していた知日派が、1940年代後半の改造日報社や亜東協会を拠点に日本研究に従事していたことを明らかにした。